英語の授業における教師の教授スタイルと 日本人中学生が感じる不安の関係

早房拓実¹⁾・星野由子²⁾*

¹⁾千葉大学大学院生

²⁾千葉大学・教育学部

The Relationship Between Teaching Styles and Japanese Junior High School Students' Anxieties in English Classes

HAYABUSA Takumi¹⁾ and HOSHINO Yuko²⁾*

¹⁾Graduate School, Chiba University

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

英語の授業は英語を使って進められることが多く、他の教科と比較すると生徒が不安を感じやすい科目である。そのため本研究では不安に着目し、外国語の授業における不安を測る尺度であるForeign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS)の結果は、日本人中学生を対象とした場合と日本人大学生を対象とした場合で同様のものが得られるか調査した。また、英語の授業における生徒から見た教師の教授スタイルと日本人中学生が感じる不安の関係について調査した。その結果、日本人大学生と日本人中学生ではFLCASの結果は異なること、教師の教授スタイルは英語の授業において生徒が感じる不安にほとんど影響を及ぼさないことが明らかになった。このことから、日本人大学生のFLCASの結果は日本人中学生には適用できないこと、英語の授業において生徒が感じる不安に影響を与えている要因は教師の教授スタイルではなく、別の要因である可能性があることが示唆された。

English classes are often conducted in English, and students are more likely to feel anxious in English classes than in other classes. Therefore, in this study we focused on students' anxiety and investigated whether the results of the Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS; a measure of anxiety in foreign language classes) targeting Japanese junior high school students and those targeting Japanese university students are similar. We also investigated the relationship between teachers' teaching styles from the perspective of students as well as Japanese junior high school students' anxieties during English classes. The results of the FLCAS targeting Japanese junior high school students differed from those of Japanese university students', and teaching styles had little influence on students' anxieties during English classes. In conclusion, the findings suggest that the results of FLCAS targeting Japanese university students are not applicable to Japanese junior high school students and the factors influencing students' anxieties during English classes may not be teaching styles, but other factors.

キーワード：言語不安 (Language Anxiety), 教授スタイル (Teaching Style),
外国語教室不安尺度 (FLCAS) (Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS)),
スピーキング (Speaking)

第1章 はじめに

平成29年告示の中学校学習指導要領の外国語科の目標として、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する」(p. 10)ということが目標として設定されている。つまり、中学校の英語の授業においては英語を通じて実際にコミュニケーションができる能力を育成することが重要視されていると言えよう。しかし、学習者は外国語学習における

4技能の中で、スピーキングに最も不安を感じる (Horwitz, Horwitz & Cope, 1986) と言われている。そのため、英語でコミュニケーションを行う能力を育成することに重点が置かれている現在の中学校の英語の授業において、授業内で不安を感じる生徒は多いことが考えられる。そして、平成29年告示の中学校学習指導要領の外国語科において、「授業は英語で行うことを基本とする」(p. 9)という記載があるため、日本語を使って進められる他の教科の授業と比べると生徒が不安を感じやすい教科であると予想される。実際に、北條 (1992) では大学生対象の研究ではあるが、59名のうち40名が大学の英語の講義に対して不安を感じていることが明らかになっている。

また、外国語の授業における不安を測る指標として、Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS)

*連絡先著者：星野由子 yhoshino@chiba-u.jp

が多くの研究で用いられている。しかし、それらの研究は日本以外で行われているものや日本人大学生を対象としたものが主であり、日本人中学生を対象とした研究はほとんど見られない。そのため、本研究では日本人中学生に対してFLCASを実施し、FLCASが日本人中学生にも適用可能であるか検証する。また、英語の授業における教師の教授スタイルに着目し、生徒が感じる不安との関係を調査する。この調査によって、教師がどのような教師像であれば生徒が感じる不安を軽減することができるのかを調べることができ、不安の少ない教室環境を作り出す上で一助になるであろう。

第2章 先行研究

2.1 外国語の活動と不安

平成29年告示の中学校学習指導要領の外国語科では、先程述べた中学校外国語科における目標を達成する際に、外国語教育の特質に応じて生徒が物事を捉え、思考する「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることが重要である（p. 10）としている。つまり、現在の中学校の英語の授業において、英語を通じて実際にコミュニケーションを行う能力を育成することが重要視されており、コミュニケーションを中心とした授業、特にスピーキング活動を取り入れた授業が多く行われている。

しかし、学習者は学習活動の中で、特に話す活動に対して強い不安を感じるということが先行研究から明らかになっている。例えば、大学生を対象とした北條（1992, 1993, 1995）では、学生は英語学習の中でも特に「みんなの前で英語を話す」、「英語で意見を発表する」、「英語によるディスカッションに参加する」などの英語を話す活動や、「英語による質問を聞いてその答えを英語で書く」、「答えを黒板に書く」、「授業中に英作文を書く」などの英語を書く活動において不安を感じる人が多く、これらの英語を話す活動や書く活動のような産出的な学習活動に対して学生は強い不安を感じるという結果が出ている。その一方で学生は、「3, 4人のグループで練習をする」、「英文を黙読する」、「全員で英文を音読する」といった活動においては不安を感じる人は少なく、これらの個人が目立たないような学習活動に対しては不安をあまり感じないという結果が出ている。

日本人中学生を対象とした佐々木（1993）では、不安の高い活動として「みんなの前で口頭発表やスキットをする」、「英語の質問を聞き、その質問に英語で答える」、「みんなの前で英語を話す」などが挙げられ、生徒は「みんなの前で」何かの活動（特にスピーキング活動）をすることへの不安が根強いということが明らかになった。また、不安が低い活動として「先生の後についてみんなで繰り返す」、「授業中、黙読をする」などが挙げられ、教師の後について繰り返したり、黙読をしたりするとき全体的に生徒はリラックスしているということが示されている。このように、学習者は話す活動や書く活動において不安を感じており、その中でも特に話す活動に対して強い不安を抱えていることがわかる。現在の中学校の英語の授業はスピーキング活動を取り入れたものが多

く行われているため、英語の授業に対して不安を感じる生徒は多いと予想される。

2.2 英語の授業における教師の態度、性格、教え方と不安

2.1で述べたように、コミュニケーション活動が重視されている現在、英語の授業に対して不安を感じる生徒が多いと考えられる。そのため、教師は英語の授業において、生徒が感じる不安をできるだけ少なくするような働きかけを行う必要がある。また、生徒が感じる不安には、英語の授業内における教師の態度や性格といった教授スタイルが影響することがわかっている。例えば、日本人大学生を対象とした北條（1992）では、英語の授業において、教師が厳しい態度で間違いを訂正したり、大げさな反応を示すと学生は強い不安を感じるということが明らかになった。その一方で、教師が間違いは誰でも犯すものであるという態度や学生が間違えても大したことではないという態度を取れば、学生の不安が低くなるということが明らかになった。また、教師の態度・性格が親しみやすく理解があれば学生は不安を感じずに済むが、授業中英語で発言するように励まされたり、発言したことに對して褒められたりすると不安を感じるということも明らかになっている。これらのことから、教師が学生に対して厳しい態度で間違いを訂正したり、励ましたり、褒めたりすると生徒は不安を感じるということが分かる。

一方で、北條（1992）とは反対の結果が出ている研究もある。ベトナム人の日本語学習者を対象とした西谷・松田（2003）では、先生が励ましてくれると感じている学習者は、クラス活動に関する不安が少なく、意思疎通にも自信を持つ傾向があると結論付けている。また、厳しく訂正する教師のクラスでは、学習者のクラス活動に関する不安度が低い傾向にあると結論付けている。また、Young（1990）では、教師が学生の間違いを大げさに捉えなければ、学生の不安が低くなるということや、学生は授業中英語で発言するように励まされたり、褒められたりすることを肯定的に捉えていたということが明らかになっている。

このように、教師が外国語の授業において生徒を励ましたり、褒めたりした際に生徒は不安を感じると結論付けている研究がある一方で、不安をあまり感じないと結論付けている研究もある。また、生徒が間違いを犯した際にその間違いに対して教師が厳しく訂正すると、生徒は不安を感じると結論付けている研究がある一方で、不安をあまり感じないと結論付けている研究もある。先行研究において異なる結果が得られていることから、本研究では英語の授業における教師の訂正の仕方や生徒への対応の仕方と生徒が感じる不安についての調査を行っていく。

第3章 方法

3.1 本研究の目的とリサーチクエスチョン

2.2で述べたように、先行研究において教師の訂正の仕方や生徒への対応の仕方と生徒が感じる不安の関係に

ついて異なる結果が出ていることから、本研究では英語の授業における教師の訂正の仕方や生徒への対応の仕方といった生徒から見た教師の教授スタイルと生徒が感じる不安の関係について調査を行った。

調査を行うにあたり、英語の授業において生徒が感じる不安を測る尺度としてFLCASを用いた。FLCASは、外国語教室不安尺度 (Foreign Language Classroom Anxiety Scale) の略であり、Horwitz et al. (1986) が「コミュニケーション不安」, 「テスト不安」, 「否定的評価への恐れ」の3観点から作成したものである。FLCASは全部で33の質問項目から構成されている5件法のスケールであり、各質問項目を得点化すると最低33点、最高165点となり、回答者の不安の程度を測ることができる。また、FLCASはHorwitz et al. (1986) の研究において、その妥当性と信頼性が示されており、多くの研究で使用されている尺度である。しかし、FLCASを用いている研究はカナダや北米の外国語学習者を対象としているものが多い。日本人英語学習者を対象とした研究に野口 (2006) やYashima, Noels, Shizuka, Takeuchi, Yamane, & Yoshizawa (2009) などがあるが、これらは大学生を対象としたものであり日本人中学生を対象としている研究はほとんど見られない。

そのため、FLCASは日本人中学生に対しても、野口 (2006) やYashima et al. (2009) と同様の結果が出るのかどうかをまず検討する必要があると考えた。これらことから、以下の2つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定した。

RQ1: 日本人中学生を対象としたFLCASの結果は、日本人大学生を対象とした結果と同様になるか。

RQ2: 教師の教授スタイルは、英語の授業において生徒が感じる不安にどのような影響を及ぼすか。

3.2 参加者

参加者は国立中学校に通う3年生142名であった。中学1, 2年生に比べて3年生の方が英語学習経験が長いいため、授業内において英語でのやり取りや会話が多く行われていると予想され、英語で発言をする機会が多いと考えられるために3年生を対象とした。

3.3 マテリアル

2種類のアンケートを使用した。1つは9項目から成る教師の教授スタイルに関する質問であり、北條 (1992) の研究で使用されていた質問項目を参考にして作成した。もう1つは、Horwitz et al. (1986) が作成したFLCASをYashima et al. (2009) が日本語に直したものについて、「外国語」という表現を全て「英語」に置き換え、さらに一部の表現を中学生に適切なものに修正したものを用いた。例として、「外国語の単位を落としたときの影響が心配だ」を「英語

の成績が下がったときの影響が心配だ」に書き換えた。また、どちらのアンケートも「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4件法で尋ねた。本来、教授スタイルに関する質問とFLCASはどちらも5件法のスケールである。しかし、アンケートにおける尺度が奇数の場合、日本や中国などの集合主義の国はアメリカやカナダなどの個人主義の国に比べて真ん中を選ぶ傾向があり、さらに日本人と中国人とでは、日本人の方が真ん中を選ぶ傾向が強い (Chen, Lee, & Stevenson, 1995) という研究結果がある。本研究においても尺度を奇数にしてしまうと回答者が真ん中を選ぶ可能性が高くなり、その結果データとして偏りが出てしまい、正確なデータを得ることができないと考えた。そのため、本研究では4件法を採用した。

3.4 分析方法

「とてもそう思う」を4, 「ややそう思う」を3, 「あまりそう思わない」を2, 「全くそう思わない」を1と数値化して分析を行った。そのため、教授スタイルに関する質問に関しては、数値が高いほど肯定的な意見であり、不安に関する質問に関しては、数値が高いほど不安度が高いと解釈していく。アンケートのそれぞれの質問項目の内容については、表3を参照されたい。

RQ1「日本人中学生を対象としたFLCASの結果は、日本人大学生を対象とした結果と同様になるか」を調査するため、FLCASについて因子分析を行った。また、RQ2「教師の教授スタイルは、英語の授業において生徒が感じる不安にどのような影響を及ぼすか」を調査するため、教授スタイルについて尋ねている9項目の値とRQ1で抽出されたFLCASの各因子に含まれる項目の平均値について相関分析を行った。

第4章 結果

初めに、アンケートの信頼性を確認するため教授スタイルについてのアンケートとFLCASにおいて、信頼性を示すクロンバックの α 係数を算出した。その結果、教授スタイルについてのアンケートは0.66, FLCASは0.95であった。教授スタイルについての値が高くなかったが、これは質問数の少なさに起因すると考えられる。

4.1 アンケートの概要

生徒が教師の教授スタイルに対して抱いている印象を把握するため、教授スタイルについて尋ねているアンケートのそれぞれの質問項目の平均値と標準偏差を求めた。その結果、表1のようになった。このことから、実験参加者は概ね教師の教授スタイルに対して肯定的な印象を持っていたことが分かる。

また、生徒が英語の授業において感じている不安の程

表1 教授スタイルについてのアンケートの記述統計

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均値	3.67	3.87	3.61	2.94	3.38	3.42	3.37	3.61	3.37
標準偏差	0.53	0.35	0.62	0.87	0.77	0.71	0.74	0.63	0.71

表2 FLCASの記述統計

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均値	2.78	3.01	2.90	2.76	2.83	2.31	3.08	1.94	2.59
標準偏差	1.05	0.97	1.07	1.04	0.88	0.88	1.00	0.92	1.05
項目	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平均値	3.32	3.27	2.75	2.77	3.06	2.51	2.12	1.80	3.05
標準偏差	0.90	0.88	1.16	1.08	1.09	0.99	1.03	0.90	0.88
項目	19	20	21	22	23	24	25	26	27
平均値	1.70	2.70	1.84	1.92	2.94	2.71	2.03	2.07	2.45
標準偏差	0.83	1.11	0.94	0.98	1.01	1.10	1.01	1.11	1.07
項目	28	29	30	31	32	33			
平均値	2.66	2.45	2.50	1.88	2.90	2.84			
標準偏差	0.94	1.03	1.14	1.05	0.99	1.05			

度を把握するため、FLCASのそれぞれの質問項目の平均値と標準偏差を求めた。その結果、表2のようになり、平均値が2.00以下の質問項目は6個、2.00から3.00の質問項目は21個、3.00以上の質問項目は6個あった。数値が大きいほど不安を感じていることになるため、本研究の実験参加者は概ね英語の授業において、ある程度不安を感じていたことが分かる。

特に、「10. 英語の成績が下がったときの影響が心配だ」と「11. 英語の授業で動揺する人の気持ちがわかる」の数値が高かったため、成績や授業に対して強い不安を感じていることが読み取れる。

4.2 因子分析

RQ1「日本人中学生を対象としたFLCASの結果は、日本人大学生を対象とした結果と同様になるか」を調査するため、FLCASについて因子分析を行った。その際、因子負荷量が|0.300|未満の項目（「6. 英語の授業中に、授業と関係ないことを考えていることがある」、「10. 英語の成績が下がったときの影響が心配だ」、「19. 先生が自分の間違いをいちいち直しそうなので心配だ」、「31. 私が英語を話すと、他の人が笑うのではないかと思う」）については、分析対象から除外した。その結果、表3のようになり3つの因子が抽出された。因子Ⅰには、人前で英語を話すことや授業で発言することなどの授業内で英語を話すことに対する不安についての項目に高い負荷量が与えられていたため、因子Ⅰを「英語を話すことに対する不安」とした。因子Ⅱには、授業の予習や内容理解、テストなどの授業に対する不安についての項目に高い負荷量が与えられていたため、因子Ⅱを「授業としての英語に対する不安」とした。因子Ⅲには、自分よりも他人の方がスピーキングが上手であることや英語が得意であることなどの他人からの自分の見え方に対する不安についての項目に高い負荷量が与えられていたため、因

子Ⅲを「周りからの評価に対する不安」とした。また、各因子におけるクロンバックの α 係数を算出したところ、因子Ⅰは0.94、因子Ⅱは0.85、因子Ⅲは0.80となり、ある程度の信頼性は得られたと考えられる。

本研究と先行研究の因子分析の結果を比較するために、本研究の因子Ⅰ～Ⅲのそれぞれに含まれている項目が、野口（2006）やYashima et al.（2009）の研究のどの因子に含まれているのかまとめたのが表4、5である。まず、FLCASは野口（2006）では4因子に、Yashima et al.（2009）では5因子に分けられており、本研究とは因子数が異なった。また、「8. 英語の授業中に行われるテストでは、だいたい落ち着いている」、「11. 英語の授業で動揺する人の気持ちがわかる」の2項目については野口（2006）で、「2. 英語の授業で間違えることは、気になる」、「8. 英語の授業中に行われるテストでは、だいたい落ち着いている」、「16. 英語の授業の予習を十分にしているでも心配になる」、「30. 英語を話すために勉強しないといけない文法規則の数に圧倒される」の4項目についてはYashima et al.（2009）で分析対象から除外されていた。本研究と野口（2006）を比較した結果、本研究の因子Ⅰに含まれている項目のうち、5項目が野口（2006）の因子Ⅰに、1項目が因子Ⅱに、7項目が因子Ⅲに含まれていた。また、本研究の因子Ⅱに含まれている項目のうち、6項目が野口（2006）の因子Ⅱに、1項目が因子Ⅳに含まれていた。そして、本研究の因子Ⅲに含まれている項目のうち、2項目が野口（2006）の因子Ⅰに、3項目が因子Ⅱに、2項目が因子Ⅳに含まれていた。本研究の因子Ⅰに含まれている項目の多くが野口（2006）の因子ⅠとⅢに含まれていること、本研究の因子Ⅱに含まれている項目の多くが野口（2006）の因子Ⅱに含まれていることが分かる。しかし、本研究の因子Ⅲに含まれている項目は野口（2006）の因子Ⅰ、Ⅱ、Ⅳに満遍なく含まれている。このことから、中学生を対象と

表3 FLCASの因子分析の結果

項目	内容	因子 I	因子 II	因子 III
24	他の人の前で英語を話すとき、他の人からの視線が気になる	0.908	-0.124	-0.071
20	英語のクラスで当たりそうになると、緊張する	0.830	0.059	0.019
14	英語をネイティブスピーカーと話すとき、緊張する	0.769	-0.212	0.151
13	英語の授業で自分からすすんで答えるのは、恥ずかしい	0.745	-0.046	0.151
3	英語の授業で当てられると思うと、緊張する	0.722	0.020	0.147
15	先生が何を訂正しているのか理解できないとき、動揺する	0.718	0.146	-0.350
32	ネイティブスピーカーに会うとき、おそらくリラックスしていられると思う*	0.613	-0.308	0.411
2	英語の授業で間違えることは、気になる	0.606	0.083	0.013
27	英語の授業で話すとき、緊張したり、混乱したりする	0.599	0.155	0.197
9	英語の授業で準備なしに話さないといけないとき、パニックになる	0.580	0.074	0.256
33	先生が、予想外の質問をすると緊張する	0.523	0.224	0.100
1	英語の授業で話すとき、自信がもてない	0.516	0.085	0.324
11	英語の授業で動揺する人の気持ちがわかる	0.479	0.060	0.107
12	英語の授業では、緊張のあまり、知っていたことも忘れてしまうときがある	0.378	0.216	0.137
22	英語の授業の予習をしなければならぬというプレッシャーを感じる	-0.202	0.977	-0.090
21	英語のテスト勉強をすればするほど、混乱する	-0.124	0.792	0.092
25	英語の授業は進むのが速いので、ついていけないかどうか心配である	-0.014	0.684	0.178
29	先生の言うことがすべて理解できないと不安になる	0.286	0.491	-0.254
16	英語の授業の予習を十分にしているにもかかわらず心配になる	0.132	0.483	0.161
30	英語を話すために勉強しないとダメな文法規則の数に圧倒される	-0.029	0.475	0.241
4	英語の授業で先生の言っていることが理解できないと、不安だ	0.366	0.466	-0.209
8	英語の授業中に行われるテストでは、だいたい落ち着いている*	-0.029	0.390	0.092
18	英語の授業で話すのに自信がある*	0.186	0.087	0.662
5	もっと英語の授業があってもよいと思っている*	-0.197	-0.140	0.576
23	常に、他の人の方が英語で話すのが上手だと感じている	0.026	0.327	0.442
26	他の科目よりも英語の授業の方が緊張する	0.138	0.403	0.430
28	英語の授業の前には、自信をもち、リラックスしている*	0.185	0.206	0.427
7	他の人の方が、自分より英語がよくできると思う	0.302	-0.100	0.360
17	よく英語の授業を休みたくなる	0.104	0.174	0.304

注. *は反転項目である

した本研究と大学生を対象とした野口 (2006) の結果は一致しないことが分かる。また、本研究とYashima et al. (2009) を比較した結果、本研究の因子 I に含まれている項目のうち、3項目がYashima et al. (2009) の因子 I に、8項目が因子 II に、1項目が因子 III に、1項目が因子 IV に、2項目が因子 V に含まれていた。また、本研究の因子 II に含まれている項目のうち、3項目がYashima et al. (2009) の因子 III に、2項目が因子 IV に含まれていた。そして、本研究の因子 III に含まれている項目のうち、4項目がYashima et al. (2009) の因子 I に、2項目が因子 III に、3項目が因子 IV に含まれていた。本研究の因子 I に含まれている項目の多くがYashima et

al. (2009) の因子 I に多く含まれていることが分かる。しかし、本研究の因子 II に含まれている項目はYashima et al. (2009) の因子 III, IV に、本研究の因子 III に含まれている項目はYashima et al. (2009) の因子 I, III, IV に満遍なく含まれている。このことから、野口 (2006) と同様に中学生を対象とした本研究と大学生を対象としたYashima et al. (2009) の結果についても一致しないことが分かる。

そして、各因子の因子間相関については表6のようになり、因子 I 「英語を話すことに対する不安」と因子 II 「授業としての英語に対する不安」($r=0.71$) において強い正の相関が見られた。また、因子 I 「英語を話すこ

表4 本研究と野口（2006）の因子分析の比較

本研究の因子 I に含まれている項目	野口（2006）
1, 2, 3, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 20, 24, 27, 32, 33	因子 I : 1, 9, 14, 27, 32 因子 II : 15 因子 III : 2, 3, 12, 13, 20, 24, 33
本研究の因子 II に含まれている項目	野口（2006）
4, 8, 16, 21, 22, 25, 29, 30	因子 II : 4, 16, 21, 22, 25, 29 因子 IV : 30
本研究の因子 III に含まれている項目	野口（2006）
5, 7, 17, 18, 23, 26, 28	因子 I : 18, 28 因子 II : 7, 23, 26 因子 IV : 5, 17

注. 野口（2006）の因子 I は「英語使用不安」、因子 II は「失敗に対する不安」、因子 III は「評価に関する不安」、因子 IV は「授業科目としての英語に対する不安・不満」である

表5 本研究とYashima et al.（2009）の因子分析の比較

本研究の因子 I に含まれている項目	Yashima et al.（2009）
1, 2, 3, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 20, 24, 27, 32, 33	因子 I : 1, 11, 13 因子 II : 3, 9, 12, 13, 20, 24, 27, 33 因子 III : 15 因子 IV : 13 因子 V : 14, 32
本研究の因子 II に含まれている項目	Yashima et al.（2009）
4, 8, 16, 21, 22, 25, 29, 30	因子 III : 4, 22, 29 因子 IV : 21, 25
本研究の因子 III に含まれている項目	Yashima et al.（2009）
5, 7, 17, 18, 23, 26, 28	因子 I : 7, 18, 23, 28 因子 III : 5, 17 因子 IV : 5, 17, 26

注. Yashima et al.（2009）の因子 I は“Lack of confidence in speaking English in class”，因子 II は“Fear of speaking in public”，因子 III は“Anxiety about not understanding everything taught in class”，因子 IV は“Helplessness and negative attitude toward the English class”，因子 V は“Comfortableness in speaking with native speakers of English”である

表6 因子 I ～ III の因子間相関

	因子 I	因子 II	因子 III
因子 I	1.00		
因子 II	<u>0.71</u>	1.00	
因子 III	0.55	0.45	1.00

注. 下線のついた数値は、 $r \geq 0.70$ の値である

表7 教授スタイルに関する項目と因子Ⅰ～Ⅲの相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ
1	1.00											
2	0.38	1.00										
3	0.31	0.35	1.00									
4	0.14	0.16	0.06	1.00								
5	0.05	0.14	0.02	0.42	1.00							
6	0.13	0.19	0.16	0.33	0.51	1.00						
7	0.15	0.15	0.17	0.36	0.58	0.78	1.00					
8	0.07	0.09	0.05	0.15	0.22	0.39	0.46	1.00				
9	0.05	0.02	0.03	0.22	0.31	0.45	0.49	0.52	1.00			
因子Ⅰ	<u>-0.11</u>	<u>-0.25</u>	<u>-0.12</u>	<u>0.00</u>	<u>-0.09</u>	<u>-0.03</u>	<u>-0.13</u>	<u>-0.21</u>	<u>-0.08</u>	1.00		
因子Ⅱ	<u>-0.10</u>	<u>-0.14</u>	<u>-0.13</u>	<u>-0.03</u>	<u>0.03</u>	<u>0.01</u>	<u>-0.08</u>	<u>-0.13</u>	<u>-0.04</u>	0.72	1.00	
因子Ⅲ	<u>-0.13</u>	<u>-0.30</u>	<u>-0.18</u>	<u>-0.12</u>	<u>-0.17</u>	<u>-0.20</u>	<u>-0.24</u>	<u>-0.18</u>	<u>-0.02</u>	0.73	0.61	1.00

注. 下線のついた数値は、教授スタイルに関する9項目とFLCASの因子Ⅰ～Ⅲの相関係数である

とに対する不安」と因子Ⅲ「周りからの評価に対する不安」($r=0.55$), 因子Ⅱ「授業としての英語に対する不安」と因子Ⅲ「周りからの評価に対する不安」($r=0.45$)のそれぞれにおいて中程度の正の相関が見られた。

4.3 相関分析

RQ2「教師の教授スタイルは、英語の授業において生徒が感じる不安にどのような影響を及ぼすか」を調査するため、教授スタイルに関する9項目の値とRQ1で抽出されたFLCASの各因子に含まれる項目の平均値について相関分析を行った。その結果、表7のようになった。教授スタイルに関する項目である1～9とFLCASから抽出された因子Ⅰ～Ⅲにおいては、中程度または強い相関は見られなかった。このことから、教授スタイルと不安には関連性がほとんどないことが分かる。

第5章 考 察

5.1 RQ1について

FLCASについて因子分析を行った結果、本研究では因子Ⅰ「英語を話すことに対する不安」、因子Ⅱ「授業としての英語に対する不安」、因子Ⅲ「周りからの評価に対する不安」の3因子が抽出された。FLCASは野口(2006)の研究では4因子に、Yashima et al. (2009)の研究では5因子に分けられており、本研究で抽出された因子数とは異なっている。また、本研究の各因子に含まれる項目が先行研究においてはどの因子に含まれているのかまとめた結果、本研究の因子Ⅰは野口(2006)の因子ⅠとⅢに、Yashima et al. (2009)の因子Ⅱに該当することが明らかになった。しかし、全体的に考えるとFLCASの項目は満遍なく分かれている。抽出された因子数が異なること、項目の分かれ方にばらつきがあることから、日本人大学生を対象にしたFLCASの結果がそのまま日本人中学生にも適用することは難しいと考えら

れる。したがって、RQ1への回答としては、日本人大学生と日本人中学生ではFLCASの結果は異なる、と結論づけることができる。

そして、因子間における相関については、因子ⅠからⅢのそれぞれの因子間において中程度、または強い正の相関が見られた。これは、3つの因子が異なる観点からではあるが全て不安について測定しているためであると考えられる。特に、因子Ⅰ「英語を話すことに対する不安」と因子Ⅱ「授業としての英語に対する不安」の間では強い正の相関が見られた。現在の中学校の英語の授業はコミュニケーション能力の育成に焦点が当てられており、生徒が授業内で英語を話す機会が多くなっている。そのため、英語を話すことに対して不安を感じている場合、授業としての英語に対しても不安を感じる傾向があると考えられ、因子Ⅰと因子Ⅱの間では強い正の相関が見られたと思われる。

5.2 RQ2について

教授スタイルに関する9項目の値とFLCASの3因子それぞれに含まれる項目の平均値について相関分析を行った。その結果、教授スタイルに関する項目である1～9とFLCASの因子Ⅰ～Ⅲにおいて特に目立った相関が見られなかった。このことから、教授スタイルと不安には関連性がほとんどないと考えられる。したがって、RQ2への回答としては、教師の教授スタイルは英語の授業において生徒が感じる不安にほとんど影響を及ぼさない、と結論づけることができる。そのため、英語の授業において生徒が感じる不安に影響を与えている要因は、教師の教授スタイルではなく、個人の特性や性別、学力などである可能性が示唆された。

第6章 結 論

本研究の目的は、不安を測る尺度であるFLCASを日

本人中学生に用いた場合、日本人大学生を対象とした先行研究の結果と同様の結果になるか明らかにすること、英語の授業における生徒から見た教師の教授スタイルと生徒が感じる不安の関係について明らかにすることであった。調査の結果、以下の2つのことが明らかになった。①日本人大学生と日本人中学生ではFLCASの結果は異なる。②教師の教授スタイルは英語の授業において生徒が感じる不安にほとんど影響を及ぼさない。本研究の限界点と今後の展望として、以下の2点が挙げられる。まずは、研究結果の一般化である。今回の研究では国立中学校の中学3年生124名を対象としたが、調査学年が3年生のみであったことや調査校が1校のみであったことから、今回の結果を一般化するのは難しいと考えられる。そのため、できる限り多くの学校で調査を行い、調査の対象も中学3年生だけでなく、中学1,2年生や小学生、高校生と範囲を広げて調査をしていきたい。そして、教授スタイルと不安に関連性がほとんど見られなかったことである。本研究では、教授スタイルは生徒の不安にほとんど影響を及ぼさない、という結果が出たため、英語の授業において生徒に不安を与えている具体的な要因について明らかにしていきたい。

参考文献

- Chen, C., Lee, S. Y., & Stevenson, H. W. (1995). Response style and cross-cultural comparisons of rating scales among East Asian and North American students. *Psychological Science*, 6(3), 170-175.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70(2), 125-132.
- Yashima, T., Noels, K. A., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S., & Yoshizawa, K. (2009). The interplay of classroom anxiety, intrinsic motivation, and gender in the Japanese EFL context. 『関西大学外国語教育研究』, 17, 41-64.
- Young, D. J. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23, 539-553.
- 佐々木郁夫. (1993). 「日本人EFL中学生の英語学力と不安について」. 『関東甲信越英語教育学会研究紀要』, 第1号, 11-22.
- 西谷まり・松田稔樹. (2003). 「ベトナム人日本語学習者の外国語不安」『一橋大学留学生センター紀要』第6号, 77-89.
- 野口朋香. (2006). 「英語学習における不安とコミュニケーション能力：不安軽減のための教室環境づくりへの提言」『外国語教育メディア学会機関誌』第43巻, 57-76.
- 北條礼子. (1992). 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（1）」『上越教育大学研究紀要』第12巻 第1号, 53-64.
- 北條礼子. (1993). 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（2）」『上越教育大学研究紀要』第12巻 第2号, 409-421.
- 北條礼子. (1995). 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（5）」『上越教育大学研究紀要』第15巻 第1号, 163-174.
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京：文部科学省.